

十一月二日

千葉「加曾利貝塚博物館」遠足日記

鈴木 眞廣

はじめに

現代は子どもの主体性や社会性が育ちにくい社会だといわれます。このような時代に生きる子どもたちなので、保育園では子どもたちの主体性の出番をできるだけ用意し、子どもたちと共に創り出す生活や遊びを心がけています。

さて、遠足ですが、「どんなことを知りたい・調べたい？」と、子どもたちの興味・関心事の中から、決まる毎年の遠足です。これまでに先輩たちが調べたものは、へ恐竜の種類や生態・実際の大きさへ雲つて何？ 雨のしくみ、虹のできるわけへ（園で飼育している）ガチョウに耳はあるのか？ などなど。知りたいことを話し合い、調整し

て行き先を決め、出かける遠足の園外保育ですが、ここでは昨年秋の遠足を紹介します。

真夏の日向に出ていたフライパンが火傷する程熱くなったことから、畑のナスを焼いてみたけれど見事に失敗。そんなことから、「昔の人は、どうやって火を熾おこしたんだろう」と知りたくなった年長の『でんき組』。火熾し体験ができるころとして二か所が候補に挙がったけれど、どちらも小学校の五年生以上のこと。電話ではらちがあかないと判断して、下見交渉に出かけた担任でした。

加曾利貝塚博物館に決定

そしていよいよ出発

必死に交渉することで、こちらの想いが伝わったんですね。加曾利貝塚博物館が、受け入れてくれることになりました。

8時41分 大貫駅出発 Mちゃんは一週間前から、七時に起きて練習したとか。地図係(?)のKちゃん、電車の中で、駅名を書いた紙を出し、「次は五井だから、あと一・二・三……六だ」とまわりの子に教える。

9時41分 千葉駅到着。たくさんの人たちにもまれつつも、全員無事に降り、点呼係がホームで人数を数える(練習時はうまく数えられていたMちゃん。駅のホームでは、「一・二……十七」と数えても、不安なのか、担任に何人? と確かめる。思わず笑う担任)。

10時8分 モノレール千葉駅にて、一人ひとりに切符が渡され、自動改札機に。握り締めた切符が改札にひっかかってしまうドキドキもあつたけれど、無事ホームへ。どこかの幼稚園の子どもたちが乗り合わせ、「一緒かねー」と思ったら、千葉動物公園で降りていきました。

10時28分 桜木駅到着。駅を降りると、向こうに茶

色の不思議な服を着た人。ガイドポランティアのおばちゃんが迎えに来てくれたのでした。

ガイド係(U君の、「道を案内する、そういうのガイドって言うんだよ」の助言で決まった子どもたちの係の名前)のR君、K君がメーカーで印をつけておいた桜木駅から加曾利貝塚までの道のりを、「まだ一つの角は曲がらない」「次の角は曲がるんだ」などの指示に、ポランティアのおばちゃんも「へえー、一年生よりすごいねえー」と感心するほど。

10時50分 加曾利貝塚博物館に到着。四人のポランティアと、いつも電話で応対してくれたうわさの「横田さん」に出会う。ここから加曾利貝塚と縄文時代の二つのグループに分かれて行動。ポランティアの人たちは、このグループの名前が素敵と感動。胸元の貝(グループの目印として、地元の海岸から拾ってきた貝をブローチやネックレスに作って着けて行った)を見て、またまた感動!

加曾利貝塚グループは、まずは竪穴式住居群跡

へ。「ここは昔の人が住んでいたお家の跡なんだよ」かびくさい部屋のガラス越しの沢山の穴ほこの説明に、一所懸命ノートに文字で書く子、絵で描く子と、みんな真剣。写真係のN君も、バシバシ撮る。貝層断面観覧施設に入ると、「おっー! すげー、貝殻だあ」と興奮気味の子どもたち。ポランティア「昔の人たちが食べていた貝の殻を捨てたところが埋まったものなんだよ」「今から五千年前の貝殻なんだよ」という説明に、へずつと前の貝殻とノートに書くなど、子どもたちにも、歴史の深さが不思議と伝わったようす。

竪穴式住居 生い茂った草むらを「元氣いい子は走れー!!」と言われて走り出すと、見えてきたのは復元された竪穴式住居群。縄文時代はまだワラがない。そこで屋根は、萱や葦、ガマで葺いた。「今はポロポロで中には入れないんだよ」と言われて、「はいりたかったなあ」とN。「じゃあ、屋根を葺いてないけど骨組みのお家の中に特別に」と、入れ

でもらった。博物館 いろいろな縄で模様を付けたいろいろな形の土器を見る。「縄で模様を付けるなんて昔の人は頭いいな」動物の剥製を見て、「すごい！」と子どもたち。ボランティア「これは、昔の人たちが食べていた動物」「石を割ったり、削ったりして作ったヤリや弓矢で、獲物を捕ったり、落とし穴を作って、イノシシを獲ったりしていたんだよ」。

縄文時代グループは、竪穴式住居跡を見て、ボランティア「このお家に何人暮らしていたでしょう？」子「十人」「二人」「五人」ボランティア「昔の人はこの一つのお家に五人くらいで暮らしていました」子「うちも五人かぞくだあ」。

貝層断面観覧施設を見て。「うわあー、トンネルみたい」と暗い施設内に入る。ボランティア「赤いまるがついているところには、大きい土器のかげらやイノシシの骨が埋まっていますよ」。子：赤い印を探し真剣に見る。カメラ係のM。絵に描かれた昔の人

の生活をすべて激写。できあがりの写真もばっちり。博物館内。ちよっと、時間が少なくなっただけで、剥製や貝殻など、子どもたちはそれぞれ興味のある所でノートをひろげメモをとる。ここまであまりノートを開くことのなかったT君。イノシシの骨を見て、ノートを開き、スケッチに専念。「終わったあ」と、「ふーっ」と大満足。

12時 お昼タイム。広場でお弁当。留守番のお友達、ちゃんと当番やったかな？ と保育園への気遣いも。

13時 いよいよ火熾し体験。博物館の人も加わり、八グループに分かれて火熾しを体験。最初はボランティアがお手本を見せてくれる。弓に張ったつるを火種になる棒に絡めて、棒をしばし回転させると、煙が立ち昇ってきた。炭化した木の粉が、火種を受けるつばきの葉の上に貯まっていく。「もう少し」「もうちょっと貯めて！」こぼれた火種からも一筋の煙。「そろそろいいかな」と貯まった火種の

粉を、用意した麻の繊維の上にそつと乗せて包み込む。それを、今度は手にもつてくるくる回すと、麻から煙がもくもくと出始めて、突然ポツと火がついた。「うわー！」と子どもたちも大歓声。自分たちもとやってみる。弓を二人で引つ張り合うのも楽しかったようで、慣れてくると息も合つて、うまいもの。ボランティアも「いいぞ」「いいぞ」と子どもたちを盛り上げてくれる。なかなか火が熾きなかったM君も、三度目の正直で火が点いて、ボランティアの男の人が「よくやったぞ」と差し出してくれた右手と無言の握手。

最後に聞きたいことは？

T「なんで昔の人は、ウサギとか食べてたんですか？」

ボランティア「昔はねえ、今みたいに食べ物がないから、動物とか食べられそうなものを見つけ食べてたんだよ」（食べ物のことは子どもたちにとつても身近。でも「獲物を獲つて食べる」という



▲火焼し体験 つるを張った弓を持つ手に力がある

ことが、衝撃的だったようす)。

M「なんで昔の人は、火熾すの、手でやらないで、弓みたいのでやったんですか?」

ボランティヤ「手でこすりあわせるだけでは、手が真つ赤になって、皮がむけるくらいやってもなかなか火が点かないので、道具を使って火を熾すことを考えたんだよ。昔の人は頭がいいねえ」

14時 お別れ。一日案内してくれたガイドボランティヤのみなさんに、ありがとうの挨拶。桜木駅へ。

15時28分 J R千葉駅団体改札口の駅員では和光の卒園児で、「おーっ」とみんなに手を振ってくれる。「和光で見たことあるお兄ちゃんだ」と子どもたちも大喜び。電車の中では興奮さめやらず、おしゃべりに花が咲く。もちろん一日の疲れでぐっすり眠る子も。

16時27分 大貫駅着 お家の人たちの「おかえり」の温かいお迎えに、子どもたちもホッとした表情が印象的。

子どもたちが聞いて覚えて、

教えてくれたこと

○昔の人はシカとかイノシシとか、ウサギとか、獲って食べてたんだよ。でもね、犬は獲物を獲るのに活躍するから、食べないで大事にしていたんだよ。

○昔の男の人はキバを腰に飾っていて、そういうのを飾っていた人は強いってことなんだよ。それで女の人は、おしゃれで貝殻とかを付けていたんだよ。

○赤ちゃんが死ぬとねー、おっきな土器に入れて埋めたんだよ。

○ノートに書いてあった「ふんせき」というのを見て、大人が「ふんせきってなあに?」と聞くと、「ふんせきってねー、犬か人間の糞がたくなったもの」と教えてくれる。

○「つりはねー、昔の人はあんまり深いところは行かなかったんだよ」(縄文時代の人は、わりと用心深かったよう)。

